

対象と言語

2008年10月15日

JOMONあかみい 山田 学 C

www.jomaca.join-us.jp

序

認識の対象と語分類・語順について考えます。対象を反映する言語の理解です。欧米語でなく日本語にて表現された、対象言語論あるいは言語的論理学あるいは世界学のすすめです。

学問用語は三浦つとむ（末尾文献参照）の用語を継承しつつもかなりを修正しました。

全体の内容を節の題名を綴ることにより示します。（数字は頁数）

認識の対象は「体内と体外と認識したい1」です。世界は「架空と現実2」です。

存在の性格には「普遍性・普遍面と特殊性・特殊面と個性2」があります。認識する自分には「生体自分と脱生体自分3」があります。

語には「体詞・静詞・動詞・関係詞・静辞・動辞3」があります。

世界には「時間と空間4」があります。「かずと質と量とかず量5」もあります。

「論理5」には「矛盾する論理6」と「絶対の論理7」があります。

「認識と推論8」があり「目的と意志と規範9」があり「言語9」があります。

「日本語の世界観10」について考え「日本語と判断17」について考えます。わたくしたちの「理想21」に触れます。

「英語の世界観22」について考え「英語の論理24」について考えます。

なお、本論はITに関し次世代の検索システムや翻訳機械などのための理論的な準備も企図しています。（とくに人間にやさしい情報分類構造の研究開発。）そして実は国学伝統の現実論化でもあります。国学伝統を現実論化してITにももの申していきます。

体内と体外と認識したい

認識には体内の認識と体外の認識と認識の反省があります。すなわち体内と体外と認識したいが認識の対象です。世界は体内と体外と認識したいの統一です。

体内を反映する語が、主体語です。主体語を辞と言います。体外や認識したいを反映する語が、客体語です。客体語を詞と言います。言語は辞と詞の統一です。

架空と現実

世界には架空の世界と現実の世界があります。

言語は、語と語順です。言語は、すなわち語と語順は、架空の世界または現実の世界の反映です。

「……ジヨバンニは、走ってそのなきさに行って、水に手をひたしました。けれどもあやしいその銀河の水は水素よりもとすきとおっていたのです。それでもたしかに流れていたことは、二人の手首の、水にひたつたところが、少し水銀いろに浮いたように見え、その手首にぶつつかっていた波は、うつくしい燐光りんこうをあげて、ちらちらと燃えるように見えたのもわかりました。」(宮沢賢治『銀河鉄道の夜』より)
「一発で死にたかつた。」(「東条英機自殺未遂の遺言」より)

普遍性・普遍面と特殊性・特殊面と個性

体内も体外も認識したいも存在です。存在には、類と部分と個があります。

人間という類には諸民族という部分と個人という個があります。たとえば人間という類には日本人という部分と豊臣秀吉という個があります。類の普遍性は、類に普遍する性格です。

人間という類の普遍性、人間という類に普遍する性格として、たとえば「直立二足歩行し概念という認識をもつ生物」があります。

部分の普遍面は、類に属する部分にも、類に普遍する性格があるという面です。

日本人という部分の普遍面、人間という類に属する日本人という部分にも、人間という類に普遍する「直立二足歩行し(以下同じ)」があるという面です。

個の普遍面は、類に属する個にも、類に普遍する性格があるという面です。豊臣秀吉という個の普遍面、人間という類に属する豊臣秀吉という個にも、人間という類に普遍する「直立二足歩行し(以下同じ)」があるという面です。

部分の特殊性は、部分のみに普遍する、類に普遍しない、特殊な性格です。

日本人という部分の特殊性、日本人という部分のみに普遍する、人間という類に普遍しない、特殊な性格として、たとえば「縄文時代から主に日

実体を反映する語が、体詞です。静的属性を反映する語が、静詞です。動的属性を反映する語が、動詞です。関係を反映する語が、関係詞です。

日本語の形式論において主に「名詞」「形容詞」「動詞」と規定されてきたものを内容論として規定し直すということです。

体内の存在には、静的存在と動的存在があります。

体内の静的存在を反映する語が、静辞です。体内の動的存在を反映する語が、動辞です。

日本語の形式論において主に「助詞」「助動詞」と規定されてきたものを内容論として規定し直すということです。

日本語の形式論において「形容動詞」「代名詞」「連体詞」「副詞」「接続詞」「感動詞」として規定されてきたものも以上の体詞・静詞・動詞・関係詞・静辞・動辞という語分類またはそれらを組みあわせた句として規定し直すことができます。

本論はたとえば日本語の内容論の解放です。

言語は主体語から客体語へ動辞・静辞・関係詞・動詞・静詞・体詞の様式です。この様式を立体的論理的に表現する情報分類構造がわたくしの理想です。

時間と空間

世界には時間と空間があります。世界は時間と空間の統一です。

時間には過去と現在と未来があります。

現在には直接現在と媒介現在があります。

直接現在は認識する自分が直接に世界の現在にいる場合の現在です。

媒介現在は認識する自分が脱生体自分として世界の現在にいるとは限らない場合の現在です。脱生体自分の自由な移行に媒介された現在です。

媒介現在には過去の現在と未来的現在と普遍的現在があります。

過去の現在は認識する自分が脱生体自分として世界の過去にいる場合の現在です。未來的現在は認識する自分が脱生体自分として世界の未来にいる場合の現在です。

普遍的現在は認識する自分が脱生体自分として世界の過去にも現在にも未来にも普遍的にいる場合の現在です。

世界の過去は追想ないし予想ないし空想ないし仮定します。

世界の未来は予想ないし空想ないし仮定ないし意図します。

世界の現在（直接現在）は確認ないし予想ないし空想ないし仮定ないし意志します。

現在とする世界の過去（過去の現在）や現在とする世界の未来（未来的現在）

や現在とする世界の普遍（普遍的現在）も、確認ないし予想ないし空想ないし仮定ないし意志することにします。

時間には時期ないし時刻があります。時間は各時期ないし各時刻のまとめりです。

世界の各時期ないし各時刻（直接現在または過去の現在または未来的現在）において空間があります。

空間には位置があります。空間は各位置のまとめりです。

世界は時間と空間の統一です。そして過去から現在、現在から未来へ、歴史があります。歴史には過程があり、歴史は各過程の統一です。歴史における各過程にはそれぞれ、生成があり発展があり消滅があります。過程の発展はすなわち運動です。

「いづれの御時おぼんときにか」（紫式部『源氏物語』冒頭）。『源氏物語』は日本語による時代観・自然観・女性男性観の表現の代表です。

かずと質と量とかず量

体外の存在や認識したいという存在のうち、実体の集りにはかずがあります。かずは実体の集りぐあい（実体における関係）です。

体外の存在や認識したいという存在のうち、静的属性はすなわち質です。質には、質の類と部分と個があります。質の部分の特殊性・個の特殊面や個の個性が、量（静的属性における関係）です。

人間は量を主體的に感覚・表象できますが客観的な計測を介して量を単位のかずとして論理的に概念することが多いです。単位のかずとして論理的に概念した量をかず量と呼びます。量にかずが浸透した、かず的な量です。連続な量を不連続なかず量として論理的に把握する、ということなのです。

物理学にて着目する量の基本は時間・距離・質量です。たとえば、「10秒」「20メートル」「30キログラム」。

論理

世界には現象があり現象の奥に構造があり構造の奥に本質があります。

世界は現象・構造・本質の統一であり、それらは諸論理の統一です。

論理は、人間が認識全体をまとめやすいように認識した、対象における関係です。

論理には絶対ぜつたいの論理と矛盾する論理があります。

絶対の論理は、対象についての概念にそれと対立する概念がともなわないうに認識した、対象における関係です。すなわち、対立する概念を絶するよう
に認識した、対象における関係です。

絶対の論理は、変化しない対象においてのみ、存在します。

一方、変化する対象においては、むしろ対象についての概念にこれと対立する概念がともなうように認識してこそ、対象における関係を客観的に把握できます。すなわち、むしろ矛盾する概念があいともなうように認識してこそ、対象における関係を客観的に把握できます。

変化する対象においては、絶対の論理でなく、むしろ矛盾する論理が、客観的に存在します。

ことわざ「万物流転」「諸行無常」「楽あれば苦あり」「会つは別れのはじめ」「古きをたずねて新しきを知る」。

矛盾する論理

矛盾する論理の本質は、何かであるとともにそれでない、です。

やや具体的には、あるものであるとともにそれに対立するものである、です。あるものと対立するものが統一されている、対立しあうものが統一されている、ということなのです。

あるものと対立するものは、調和したり、闘争したりします。(対立しあうものの調和・対立しあうものの闘争)

ことわざ「一石二鳥」か「あぶはちとらず」か。「なんじの敵を愛せ」か「目には目」か。

長期的大局的には、あるものはそれに対立するものとの連関において、あります。この場合、あるものは、それに対立するものとの連関を理解することにより、まとも理解できます。対立するものとの連関についての理解を媒介させることにより、まとも理解できます。したがってこの場合、あるものの理解は、それに対立するものの理解により媒介される、と表現します。逆に、対立するものの理解があるものの理解を媒介する、と表現します。(媒介という論理)

英語は、それに対立するたとえば日本語との連関を理解することにより、まとも理解できます。英語論は、日本語論により媒介されます。日本語論が英語論を媒介します。

あらゆる意味の歴史において、あるものから、いったんそれに対立するものへ移行し、さらにもとのものへ移行する、という論理があります。あるものが、いったん対立するものとなり(すなわちあるものの否定)、さらにもとのものとなることにより発展する(すなわちさらに対立するものの否定)、という論理があります。(否定の否定という論理)

ことわざ「急がばまわれ」。目標への取組みが、いったん別の準備への取組みとなり、さらにもとの目標への取組みとなることにより発展する。

一方、あるものじたいが、それに対立するものの性格をもあわせもっている、ということがあります。このとき、あるものは、直接に、対立するものである、と表現します。(矛盾する論理のひとつである、直接という論理)

ことわざ「長所は短所」。長所は、直接に、短所である。

あるものの理解がそれに対立するものの理解により媒介されるとともに、そのあるものが直接に対立するものであるということが多くなっていく、ということがあります。この場合、あるものに対立するものが浸透する、と表現します。(媒介という論理と直接という論理が統一されている、浸透という論理)

生産論が消費論により媒介されるとともに、生産が直接に消費であるということが多くなっていく。(生産は生産手段と労働力の消費です。)(生産に消費が浸透します。消費論が生産論により媒介されるとともに、消費が直接に生産であるということが多くなっていく。(消費は労働力の生産です。)(消費に生産が浸透します。)

あるものに関係している量が変化すると、あるものがそっくり対立するものとなってしまふ、ということがあります。量が変化すると、あるものが対立するものに転化する、という論理です。これは、量の変化につれて、質が変化する、ということです。(転化という論理、あるいは量質転化という論理)

ことわざ「ちりもつもれば山となる」。つもる量が変化すると、軽いちりが重い山に転化する。

あるものの形式が対立するものの形式になるとともに、もとのあるものの内容はそれなりに保存される、ということがあります。内容が形式を転化させてそれなりに保存される、ということがあります。この場合、古い内容と形式が新しい内容と形式に止揚^{しやう}される、と表現します。こういう変化を人間の意志によりおこす場合は、古い内容と形式を新しい内容と形式に止揚する、と表現します。(止揚という論理)

諸国家の公務形式が調和人間社会の公務形式になるとともに、諸国家の公務内容はそれなりに保存される、という理想はないでしょうか。諸国家の公務の内容と形式を調和人間社会公務の内容と形式に止揚する、という理想はないでしょうか。

矛盾する論理を説明するとき、あるものと対立するものの区別を理解するとともに、あるものと対立するものの連関を理解します。あるものと対立するものの区別と連関を理解します。

絶対の論理

生産・政治・思想における説明・説得のため、世界の変化しない一部分について表現し続けることもよくありました。

その際、変化しない対象について「いくつかの判断が真理または誤謬ならそれらを組み合わせたかという推論は必ず真理または誤謬である。」という推論法則も、よく利用されました。

以上はただし、絶対の論理の把握と表現です。

井沢元彦氏の提案を『日本史集中講義』（文献33）p355～6から引用します。

「日本は、ある意味メンタリティを国内向けと国外向けに使い分けなければいけない、という時期に差し掛かっているのだと思います。

日本では自己主張するのは、わがままだという捉え方をされ、悪いことだとされます。しかし海外では自己主張しなければ、一日もやっていけません。

これは中国であろうと、アメリカ力であろうと同じです。」

認識と推論

認識には感覚と表象と概念があります。概念には（非判断）概念と（非推論）判断と推論があります。判断は特殊な概念であり推論は特殊な判断です。

まず、表象の調和を求める認識があります。日本語人が好む認識です。

日本語人が好む、表象の調和を求める認識を体系的にするべく、民族地理学者の川喜田二郎氏が「KJ法」を創始しました。（『川喜田二郎著作集』など参照）「KJ法」は、自分の未知の世界に取材し諸現象からその奥にある構造を把握していくための、事務と思索の技である。そのようにわたくしは考えています。

次に、変化する対象について対立するものの区別と連関を解明していく概念判断 推論があります。矛盾論理学の推論です。

次に、変化しない対象について対立するものを絶する概念 判断 推論があります。絶対論理学の推論です。

最後に、すでに把握した本質論から構造論へ構造論から現象論へ展開していく概念 判断 推論があります。

本質論 構造論 現象論と展開する概念 判断 推論が学問体系の理想です。

人間による認識が現実の世界を正しく反映しているか否か。正しく反映していればその認識は真理であり正しく反映していない部分があればその認識はその部分において誤謬です。

学問においてたとえば「電圧値と電流値は比例する。」という認識があります。しかし一定の条件をはずれると「電圧値と電流値が比例しない。」こともあります。「電圧値と電流値は比例する。」という認識が真理である

のは世界のうち一定の条件を満す限られた範囲を対象とする場合のみです。その限られた範囲を対象として「電圧値と電流値は比例する。」という認識は絶対的真理です。

一般にある認識が絶対的真理であるためには認識対象としてその適用範囲というものがあります。

ですから一般にいかに真理らしい認識であっても一定の適用範囲があり適用範囲から逸脱しなければ絶対的真理であり適用範囲から逸脱すると逸脱した部分において誤謬となります。ですから一般に真理らしい認識はすべて「どちらかと言えば真理である。」という相対的真理なのです。

人間の主体性の発達はすなわち健康平和な現実論の発達です。
現実論は以下のように発達させます。

人間による認識は世界の各分野の現象・構造・本質に対して未知あるいは架空論を有している部分があります。そういう認識のままに感覚的にか表象的に概念的にか世界の問題部分に対して予想し予想の正否を実験ないしは実践により確認します。そうしてしだいに未知を既知にし架空論を現実論に再編していきます。現実論は予想実験により発達させます。

以上のように現実論を発達させる過程を健康平和に進めます。それが人間の主体性です。

ことわざ「論より証拠」。

目的と意志と規範

人間は世界の未来ないし現在に対し、認識による体内の調整をともない、目的という認識をもつことがあります。そして目的を実現する過程が意志です。意志は認識の過程であり、目的を実現する過程です。

人間は、自分の主体的な意志を脱生体自分により反省し、客観的に調整することがあります。この認識が規範です。規範は、認識を認識により調整することであり、自分の主体的な意志の客観的な調整です。

言語

表現には表現者が対象を認識して表現したという過去との関係があります。

表現内容はその表現につながっている表現者の過去の認識です。

言語は特殊な表現であり主に音声言語と文字言語があります。

言語には言語者が対象を認識し標準概念化して言語したという過去との関係があります。

言語内容（意味）はその言語につながっている言語者の過去の認識です。

音声言語において（感覚を超えた）標準概念の列に（感覚される音声を超え

た)音声の種類(≡音韻)の列を物質的像としてつなぐ社会的な規範が、音声言語規範です。音声言語には(感覚される音声において)音楽的表現もともないます。

乳児・幼児にはまず、養育者との関係において、音楽的や身ぶりのな表情や表現の反復があります。そういう土台において(だいに言語)とくに音韻)模倣表現や言語表現が発達していきます。それとともに生活の時間空間内の感覚・表象を土台として(だいに概念が発達していきます)。

文字言語において(感覚を超えた)標準概念の列に(感覚される文字を超えた)文字の種類(≡字韻)の列を物質的像としてつなぐ社会的な規範が、文字言語規範です。文字言語には(感覚される文字において)絵画的表現もともないます。

言語は語 句 節 文 文章として構成され、それはすなわち、語を並べることです。語と語順です。

言語は、一定の表現状況のもと、語と語順を表現し、また、非言語的表現(音声言語にともなう音楽的表現や文字言語にともなう記号表現・絵画的表現・改行段落表現)により、言語者が表現したい概念・表象・感覚を表現しています。言語において、より具体的な概念や表象や感覚は、語の累積と語順と非言語的表現と表現状況により、表現されています。

表現ないし言語は世界認識の交流や組織を媒介する物質的像です。言語形式には言語人の世界認識の様式や認識交流の様式が反映しています。

諸言語の形式と内容を検討し、諸言語人が体内と体外と認識したいの現象・構造・本質をどのように認識してきたか、その認識をどのように交流しあってきたか、探究する。これがわたくしたちの言語的論理学あるいは世界学です。

人間社会の認識伝統は概念の闘争と調和であり判断の闘争と調和であり推論の闘争と調和でありました。

諸言語形式の発展は生産・交通の発展や呪術・宗教・哲学・政治・現実論の発展を反映しています。

ある原言語からある目的言語へ翻訳する際、原言語の意味と翻訳された目的言語の意味を同じにします。とともに、原言語には原言語規範の世界観・論理が反映し、翻訳された目的言語には目的言語規範の世界観・論理が反映しています。同じ意味を異る世界観・論理により表現するという創造です。

日本語の世界観

語(辞と詞)以前に、接頭または接尾する詞の部分があります。詞部しぶと呼びます。詞または詞部に詞部を合成する合成詞が日本語には多いです。

日本語の遠近関係を表す合成詞および省略句は次です。

遠近関係接頭「こ」「そ」「あ」「ど」＝ 認識する自分との遠近関係を表す接頭詞部

抽象実体接尾「れ」＝ 抽象実体を表す接尾体詞部

合成体詞「これ」「それ」「あれ」「どれ」

抽象静属接尾「う」＝ 抽象静的属性を表す接尾静詞部

合成静詞「こう」「そう」「あつ」「どう」(これは日本語「かう」「さう」などとは異なる現代的提案です。)

方向接尾「ちら」＝ 方向を表す接尾関係詞部

合成関係詞「こちら」「そちら」「あちら」「どちら」

位置接尾「こ」＝ 位置を表す接尾関係詞部

合成関係詞「ここ」「そこ」「あそこ」「どこ」

省略句「この」「その」「あの」「どの」 合成体詞「これ」「それ」「あれ」「これ」+ 静辞「の」

日本語のかずに関する合成詞は次です。

かず詞「一」「二」「三」など＝ かずを表す関係詞

個実体接尾「名」「人」「本」「羽」「匹」「頭」「枚」「個」「箱」「台」など

＝ 実体の集りにおいて分野別に個の実体を表す接尾体詞部

合成体詞「一名」「二人」「三本」「四羽」「五匹」「六頭」「七枚」「八個」

「九箱」「十台」など

なお、「十年間の苦勞」の「十年」は「年」という時間の単位(関係の実体化)の「十」の集りたる量です。一方、「平成十年」の「十年」は平成時代の「年」の集りにおいて「十」番目の個の「年」たる時期(関係)です。語は同じ「十年」であるとともに認識対象は異り量と時期です。

語の内容は変化しないとともに語の連続において音韻法則などにより語の形式は変化することがあります。これを内同形変と呼びます。

日本語の形式論において「活用」と規定されているものはほとんどがこれです。

たとえば動詞「行く」に動詞「できる」の内容が浸透して形式変化した動詞「行ける」があります。内容浸透による形式変化ですから内容浸透形変と呼びます。

英語などの形式論において「屈折」と規定されているものは多くがこれです。

日本語の静詞への接尾や動辞などについてまとめます。

静詞「辛い」

様相接尾「そう」＝ 様相を表す接尾静詞部

合成静詞「辛そう」(「辛」は「辛い」の内同形変)

傾向接尾「め」|| 傾向を表す接尾関係詞部

合成関係詞「辛め」

量接尾「さ」|| 量を表す接尾関係詞部

合成関係詞「辛さ」

実質接尾「み」|| 実質を表す接尾体詞部

合成体詞「辛み」

接尾「らしい」|| 「にふさわしい」を表す接尾静詞部

合成静詞「達人らしい」|| 「達人らしい身のこなし」

省略句「寒がる」|| 静詞「寒い」の内同形変「寒く」+動詞「ある」

伝聞動辞「そう」|| 伝聞を表す動辞

「その料理は辛いそうだ。」

推定動辞「らしい」|| 推定を表す動辞

「情報を総合すると、まだ見ぬその方は達人らしい。」

欲求動辞「たい」|| 欲求を表す動辞

「会いたい。」

合成関係詞「たさ」|| 欲求動辞「たい」の内同形変「た」*量接尾「さ」

「会いたさ」

省略句「たがる」|| 欲求動辞「たい」の内同形変「たく」+動詞「ある」

「会いたがる」

断定動辞「ある」|| 断定を表す動辞

予想動辞「う」|| 予想からの回帰を表す動辞

省略句「たかろう」|| 欲求動辞内同形変「たく」+断定動辞「ある」の

内同形変「ある」+予想動辞「う」

「会いたかろう。」

追想動辞「た」|| 追想からの回帰を表す動辞

省略句「たかった」|| 欲求動辞内同形変「たく」+断定動辞「ある」の

内同形変「あり」+追想動辞「た」

「会いたかった。」

無語記号 || 語の概念はあるとともに語は省略することを示す解説用記号

省略句「たがった」|| 欲求動辞内同形変「たく」+動詞「ある」の内同

形変「あり」+ (断定動辞「ある」の無語)+追想動辞「た」

「君は会いたがったね。」

断定敬動辞「ます」|| 断定動辞「ある」の敬語

「あなたは会いたがりました。」(「たがり」は省略句「たがる」の内同

形変、「まし」は断定敬動辞「ます」の内同形変)

意図動辞「う」＝ 意図からの回帰を表す動辞

「百歳まで生きよう。」の「生きよう」 動詞「生きる」の内同形変「生きよ」 + (断定動辞「ある」の無語) + 意図動辞「う」(「生きる」の「未然形」に「生きよ」を追加するという提案です。)

意志動辞 ＝ 意志の動辞の無語

「おれは必ず勝つ。」

意志敬動辞「ます」＝ 意志を表す敬語の動辞

「わたくしは必ず勝ちます。」

確認動辞「た」＝ 確認からの回帰を表す動辞

「さあ、朝青龍まわしをとった。」の省略句「とった」 動詞「とる」

の内同形変「とり」 + (断定動辞「ある」の無語) + 確認動辞「た」

断定動辞「だ」＝ 断定を表す動辞

「きれいだ。」 静詞「きれい」 + 断定動辞「だ」

断定敬動辞「です」＝ 断定動辞「だ」の敬語

「美しいです。」 静詞「美しい」 + 断定敬動辞「です」

否定動辞「ない」＝ 否定を表す動辞

「そうでない。」 合成静詞「そう」 + 否定動辞「だ」の内同形変「で」

+ 否定動辞「ぬい」

否定動辞「ぬ」＝ 否定を表す動辞

「あきらめません。」 動詞「あきらめる」の内同形変「あきらめ」 +

意志敬動辞「ます」の内同形変「ませ」 + 否定動辞「ん」

設問静辞「か」＝ 設問を表す静辞

「金がないですか。」 体詞「金」 + 連続静辞「が」(後述) + 静詞「ない」

+ 断定敬動辞「です」 + 設問静辞「か」

肯定関係詞「はい」＝ 肯定を表す関係詞

「はい。」 肯定関係詞「はい」 + (断定動辞「ある」の無語)

「止めますか。」 動詞「止める」の内同形変「止め」 + 意志敬動辞「ま

す」 + 設問静辞「か」

否定関係詞「いいえ」＝ 否定を表す関係詞

「いいえ。」 否定関係詞「いいえ」 + (断定動辞「ある」の無語)

感動動辞「ああ」＝ 感動を表す動辞

「ああ、助った！」 感動動辞「ああ」 + 動詞「助る」の内同形変「助

り」 + (断定動辞「ある」の無語) + 確認動辞「た」

場合動辞「ば」＝ 場合を表す動辞

「これを飲めば」の「飲めば」 動詞「飲む」の内同形変「飲め」 + 場

合動辞「ば」

仮定動辞「ら」〓 仮定を表す動辞

「それがほんとうなら」の「ほんとうなら」 関係詞「ほんとう」 + 断定動辞「だ」の内同形変「な」 + 仮定動辞「ら」

仮定関係詞「もし」〓 仮定を表す関係詞

「もし宝くじに当たったら」の「もし」^{当り}「当たったら」 仮定関係詞「もし」
〔動詞「当る」の内同形変「当り」 + (断定動辞「ある」の無語) + 確認動辞「た」 + 仮定動辞「ら」

追加静辞「も」〓 追加を表す静辞

「もしもピアノが弾けたなら」の「もしも」^{弾け}「弾けたなら」 仮定関係詞

「もし」 + 追加静辞「も」[〓] 動詞「弾ける」の内同形変「弾け」 + (断定動辞「ある」の無語) + 確認動辞「た」 + 断定動辞内同形変「な」 + 仮定動辞「ら」

「五番街へ行ったならば」の「ならば」 断定動辞内同形変「な」 + 仮定動辞「ら」 + 場合動辞「ば」

命令動辞 〓 相手意志への要求の動辞の無語

「必ず来ること。」 関係詞「必ず」 + 動詞「来る」 + 抽象体詞「こと」 + 命令動辞

「起立！」 動的属性の実体化を表す体詞「起立」 + 命令動辞

「走れ。」 動詞「走る」の内同形変「走れ」 + 命令動辞

「行かないで …」 動詞「行く」の内同形変「行か」 + (断定動辞「ある」の無語) + 否定動辞「ない」 + 断定動辞「だ」の内同形変「で」 + 命令動辞

制止動辞「な」〓 相手意志に望まない事態の否定を表す動辞

「ここから中へ入るな。」の「入るな」 動詞「入る」 + (断定動辞「ある」の無語) + 制止動辞「な」

必然想念動辞「べし」〓 それが必然との想念を表す動辞

「健康平和を祈るべし。」

「環境問題の解決に挑むべきだ。」の「べきだ」 必然想念動辞「べし」

の内同形変「べき」 + 断定動辞「だ」

日本語の動詞への接尾についてまとめます。

加勢接尾「せる」^{させ}〓 加勢を表す接尾動詞部

合成動詞「勝たせる」 動詞「勝つ」の内同形変「勝た」*加勢接尾「せる」

「君を勝たせてやろう。」の「勝たせて」 合成動詞「勝たせる」の内同形変「勝たせ」 + (断定動辞「ある」の無語) + 確認動辞「た」の

内同形変「て」

動詞「悲しむ」＝ 静詞「悲しい」と関連して成立した動詞

合成動詞「悲しませる」 動詞「悲しむ」の内同形変「悲しま」*加勢接尾「せる」

「わたしはあなたを悲しませ ない。」「の「悲しませ ない」 合成動詞「悲しませる」の内同形変「悲しませ」 + (断定動辞「ある」の無語)+否定動辞「ない」 + 意志動辞

合成動詞「教えさせる」 動詞「教える」の内同形変「教え」*加勢接尾「せる」の内同形変「させる」

「教えさせ ていただきます。」「の「教えさせ て」 合成動詞「教えさせる」の内同形変「教えさせ」 + (断定動辞「ある」の無語)+確認動辞「た」の内同形変「て」

本然接尾「れる」＝ 本然を表す接尾動詞部

合成動詞「やられる」 動詞「やる」の内同形変「やら」*本然接尾「れる」

以下同様、「歌われる」「歌う」の「歌わ」*「れる。」「叱られる」「叱る」の「叱ら」*「れる。」「巻きこまれる」「巻きこむ」の「巻きこま」*「れる。」「行かれる」「行く」の「行か」*「れる。」「想われる」「想う」の「想わ」*「れる。」「帰られる」「帰る」の「帰ら」*「れる。」「

「地震にやられた。」「やられ」は「やられる」の内同形変。以下同様。「この歌はよく歌われました。」「歌われ」は「歌われる」。「いたずらをして叱られた。」「叱られ」は「叱られる」。「問題に巻きこまれた。」「巻きこまれ」は「巻きこまれる」。「ひとりですちまで行かれるかい。」「あの人のことが気の毒に想われる。」「西郷さんは帰られました。」「帰られ」は「帰られる」)

以上は自然・人心・教育・縁・安定・内面・自律の例です。本然接尾「れる」こそは自然から体内までが連続した日本語らしい素朴な世界観の接尾動詞部です。

言語には学問言語と交流言語があります。学問言語は人間社会において学問を発達させる言語です。交流言語は人間社会において交流ないし組織を発達させる言語です。日本語の敬語は交流言語です。

架空論を押しつける権力の上下関係には反対するべきですが、自由と平等と健康平和の立場においても現実論の理念・理論・技・規律の高みをめざす上下関係は大切です。平等は高みをめざす機会の平等です。そういう上下関係において日本語の敬語を考えたいものです。日本語の敬語には敬意表明と下位表明

と上位表明があります。

敬意表明〃 言語理解者が上位者であることを表す動辞や句

断定動辞「ある」における敬意表明

断定敬動辞「ます」

断定敬句「ごさいます」 動詞「ござる」の内同形変「ござい」 + 断定

敬動辞「ます」

意志動辞 における敬意表明

意志敬動辞「ます」

断定動辞「だ」における敬意表明

断定敬動辞「です」

下位表明〃 下位者であることあるいは下位者のものや動作であること

を表す接頭・接尾や句

詳細は文献24「謙讓語」参照

上位表明〃 言語者に対して上位者であることあるいは上位者のものや

動作であることを表す接頭・接尾や句

同「尊敬語」参照

とても素朴な世界観の本然接尾「れる」を英語の形式論にあわせて分析しようとしたためか、「受身」「可能」「自発」「尊敬」という機能論がなされていきます。敬語の上位表明を簡略にしようとしたためか、上位表明が、あまり明確でない「れる」に偏る傾向もあります。英語の動辞「can」にあたる日本語の動辞がないことも事実です。むしろ本然接尾「れる」こそは英語人の世界観と日本語人の世界観の区別と連関を説明していくための糸口です。

日本語には、それが必然との想念を表す動辞「べし」があり、加勢を表す接尾動詞部「せる」があり、本然を表す接尾動詞部「れる」があります。日本語人の世界認識の象徴ではないでしょうか。

日本語には、敬動辞「ます」「です」があり、下位表明句「おゝする」(たとえば「お迎える」)があり、上位表明句「おゝになる」(たとえば「お読みになる」)があります。(「おゝになる」の「に」は断定動辞「だ」の内同形変)日本語人の認識交流の象徴ではないでしょうか。

必然想念動辞「べし」と敬動辞「ます」「です」と禅宗の生活、加勢接尾「せる」と下位表明句「おゝする」と法華宗の「自力」、本然接尾「れる」と上位表明句「おゝになる」と浄土宗の「他力」。どこかしらつながっていないでしょうか。

こういう日本語人の認識と、一方、英語の文型などに象徴される英語人の行動性ないし論理性との矛盾をどう解決していくか。これが黒船来航以来の日本

語人の文化問題であり、未だに途上にあります。対象言語論あるいは言語的論理学を開拓するゆえんです。

最後に、日本語の交流言語の文末に多い「の」「よ」「ね」です。

象体詞「の」＝ 前句の認識内容の実体化を表す体詞

「ちよつとそこまで出かける の。」「の」の「意志動辞 + 抽

象体詞「の」+ (断定動辞「ある」の無語)

「ちよつとそこまで出かける」＝「の」

「これでいいのだ。」「の」のだ (断定動辞「ある」の無語)+ 抽

象体詞「の」+ 断定動辞「だ」

「これでいい」「の」

象体詞「の」は日本語においてももつとも抽象的な体詞です。

伝達静辞「よ」＝ 伝達を表す静辞

「プレゼントが届いたよ。」

「ヨノナカバカナノヨ」の「ナノヨ」 断定動辞内同形変「ナ」+

象体詞「ノ」+ (断定動辞「ある」の無語)+ 伝達静辞「ヨ」

「ヨノナカバカダ」＝「ノ」

同意静辞「ね」＝ 同意を表す静辞

「初心^なのねえ…」の「なのねえ」 断定動辞内同形変「な」+

象体詞「の」+ (断定動辞「ある」の無語)+ 同意静辞「ねえ」

「初心^なだ」＝「の」

「幸せになるうね。」「の」なるうね 動詞「なる」の内同形変「な

ろ」+ (断定動辞「ある」の無語)+ 意図動辞「う」+ 同意静辞「ね」

日本語と判断

言語には概念単位句があります。語の概念より句の概念として具体的概念を標準化する場合があります。言語者が表現したい具体的概念を標準化する際いくつかの標準概念を組みあわせることが良い場合です。

「研究する」「研究」+「する」

「地球環境問題」「地球」+「環境」+「問題」

「内閣官房副長官事務」「内閣」+「官房」+「副」+「長官」+「事

務」

「青色発光ダイオード」「青色」+「発光」+「ダイオード」

言語には判断構成単位句があります。判断の教育をするためにはたとえば判

断構成単位句ごとに日本語の分ち書きも良いかもしれません。

「鳥が飛ぶ時には 空気が 動く。」

「鳥は 飛ぶ時 どうするか。」

判断構成単位句には(非判断) 概念句と(非推論) 判断句と推論句があります。

(非判断) 概念句は無記号、(非推論) 判断句は 記号、推論句は 記号を付します。

「試験に 落ちた。」「だから 勉強しろと きびしくいったじゃ ないか。」

「準備が 完了です。」「では はじめよう。」

「おやじが 怒っている。」「でも 心配することは ないよ。」

体内と体外と認識したいの統一たる世界には関係があります。関係は辞を含む句・節・文・文章により説明されます。体外や認識したいにある関係を認識するにも認識する自分の体内の存在を媒介として認識します。人間は体外や認識したいにある関係を体的に認識している、ということなのです。

「ロミオは ジュリエットを 愛しています。ロミオを ジュリエットは 愛しています。」 = 生体自分の体外のロミオとジュリエットの人間関係を辞「は」「を」「て」「ます」「を」「は」「て」「ます」の主体的概念を媒介として認識しています。(断定動辞「ある」の無語)

ただし、英語は動作関係の語順による表現が発達しています。

「Romeo Loves Juliet. Juliet Loves Romeo.」 = 前後の (断定動辞 do) の無語)のみを媒介として認識しています。

節と文は判断構成単位句の累積です。文は日本語の文字言語において主に記号「。」により区切る言語単位です。節は判断構成単位句が多い文を内容において区別した部分です。文章は文の累積です。

概念・判断・推論がわかりやすい文章は文章理解者が語・句・節・文の形式と内容を区別しやすい短期記憶しやすい文章です。日本語の文字言語において記号「、」「。」「。」の用い方も大切です。

「竹中さんは この道が近いと いった。だが 信じられない。」

「竹中さんは この道が近いと いったが、信じられない。」

日本語において、判断構成単位句のあり方、文のあり方は、微妙に変化させることができます。

日本語の「は」と「が」について考えます。

普遍判断用静辞「は」 = 類の普遍性について判断しようとする静辞

「梅は 春に咲く。」

梅という類の普遍性としていつに咲くかという判断があります。

「梅は」の「は」は梅という類の普遍性について判断しようとする静辞であり「春に咲く」という判断句を結びつけています。

「反作用は つねに 作用と方向が反対で 大きさが 等しい。」

「反作用は」の「は」は反作用という類の普遍性について判断しようとする静辞であり、「つねに」という概念句を介し、「作用と方向が反対で」という判断句を結びつけさらに「大きさが」という概念句を介して「等しい」という判断句を結びつけています。

特殊判断用静辞「は」は 部分の特殊性について判断しようとする静辞

「梅は 咲いたか、桜は まだかいな。」

開花が待ち遠しい花という類において梅という部分と桜という部分があります。梅という部分の特殊性として開花状況を問う判断があり、桜という部分の特殊性として開花状況を問う判断があります。

「梅は」の「は」は梅という部分の特殊性について判断しようとする静辞であり「咲いたか」と問う判断句を結びつけています。

「桜は」の「は」は桜という部分の特殊性について判断しようとする静辞であり「まだかいな」と問う判断句を結びつけています。

「だれが何といても、私は 平気だ。」

平気な人も平気でない人もいるという類において私という部分があります。

「だれが何といても」という概念句を介し、「私は」の「は」は私という部分の特殊性について判断しようとする静辞であり「平気だ」という判断句を結びつけています。

連続静辞「が」は 前の語の概念にあとの語の概念を連続させる静辞

「わが涙」(「わが」は「われが」の省略句)の「が」は「われ」の概念に「涙」の概念を連続させる静辞です。

「目に見るがごとく」の「が」は「見る」の概念に「ごとく」の概念を連続させる静辞です。

「風が吹いて、木がゆれる。」「風」の概念に「吹き」(「吹い」は「吹き」の内同形変)の概念を連続させる静辞「が」と「木」の概念に「ゆれる」の概念を連続させる静辞「が」です。

「心配したが、それほどのことも なかった。」「た」の概念に「それ」の概念を連続させる静辞「が」です。

静辞「が」は静辞「は」と異り、何かについて判断しようとする静辞ではありません。また、たとえば英語の形式論の概念を適用できないとても素朴な静辞「が」です。

「象は 鼻が長い。」

象という類の普遍性について判断しようとする静辞「は」であり「鼻が長い」という判断句を結びつけています。その判断句において「鼻」の概

念に静詞「長い」の概念を連続させる静辞「が」です。

「静香は スケートが得意で、康介は 水泳が得意だ。」

静香と康介という類において、静香という部分の特殊性について判断しようとする静辞「は」であり「スケートが得意で」という判断句を結びつけています。その判断句において「スケート」の概念に関係詞「得意」の概念を連続させる静辞「が」です。康介という部分の特殊性について判断しようとする静辞「は」であり「水泳が得意だ」という判断句を結びつけています。その判断句において「水泳」の概念に関係詞「得意」の概念を連続させる静辞「が」です。

「〜は〜が〜」こそは日本語らしい文型(ないし節型)です。文章の内容として主題と説明のあることが多いです。

文章でなく文の内容として主題と説明のあることもありますが、ないこともあります。

文の内容として主題と説明のある場合、文の主題を表現した部分を主部、説明を表現した部分を述部、と言います。

文に主部と述部がある場合、たとえば「〜は〜である。」という概念規定の文型もありますが、それは特殊な文型であり、普遍的な文型ではありません。

『吾輩は 猫である』＝夏目漱石は、当時最新流行の文型を畜生に用い、深くからかいました。

英語の判断の慣習は動作判断 われと神を中心とするたれまたは何が たれまたは何を どうする。 です。それが英語の「主句 動作句 対象句」という文型に反映しています。英語の他の判断の文もこの文型に似せる傾向があります。

「古池や 蛙飛びこむ 水の音」(芭蕉)

ある水の音からの底深い情念を訴える芭蕉の判断と、英語の動作判断は、もとより異質です。

体内感覚の対象たる体内を体外であるかのように認識する脱生体自分もあります。その脱生体自分は体内を体外化した存在に実体と静的属性と動的属性と関係を認識します。それらを反映する語は詞です。

「あいつの腹はわからない。」の「腹」＝ 体内を体外化した実体を表す体詞

ところで、わたくしは名古屋生れの名古屋育ちであります。名古屋人は名古屋ことばを解するという意味の仲間うちにおいて名古屋ことばを解放するとともに、それ以外の人には名古屋「ことば」を封印する傾向があります。名古屋ことばを解さない人は、名古屋人のそついう腹のあることを解していないのであります。齋藤 孝氏が川端康成の『雪国』を名古屋ことばに

て朗読してもらつなどの試みをし、美しい名古屋ことばの朗読のあることを、あらためてわたくしはうれしく感じております。

『CDブック 声に出して読みたい方言』（文献25）より引用します。

「くわんげい国境の長なげあとんネルをくぐるとよー、まあひゃあそこが雪国ゆきくにだつたでかんわ。」

理想

わたくしたちは健康平和教育と保健をより正しくより善くより美しく実行します。

健康平和教育と保健を推進する概念・判断・推論と字韻・音韻を育てていきます。

表現は世界の部分を表現し人間の健康平和な交流と組織を推進するものでありたいです。ある表現があればその表現に表現された世界の部分をできる限り追認識します。

今ありこれからありたい学問の日本語・生産の日本語・道徳の日本語・批評の日本語の構造を説明してとくに日本語伝統と中国語伝統と英語伝統を分類整理します。今ありこれからありたい日本語の概念・判断・推論と字韻・音韻の構造からとくに日本語伝統・中国語伝統・英語伝統に学ぶということです。

過去の労働に連関している生産物の価値や過去の認識に連関している言語の意味を正視する、価値や意味を正視する、形式主義でない内容主義の日本社会ないし人間社会を、わたくしたちは望みます。

自由と平等と健康平和の立場の表現のためにとくに日本語の長所短所や中国語の長所短所や英語の長所短所をわたくしたちは自覚していきます。

とくに（現在においてもっとも世界的な）英語と（言語史においてとても古い素朴な）日本語の区別と連関を、内容論として現実論として研究していくところ、日本語人が国際化していくためのもっとも基礎的な研究なのであります。

松本克己氏は朝鮮語・日本語・アイヌ語・ギリヤーク語を環日本海言語圏と分類し、その幕開けを今から二万年以上前としています。（文献26参

照）

英語についても中途半端な形式論ないし機能論、日本語についても中途半端な形式論ないし機能論。そういう現状において、日本語人の主体的な国際化がまともにも可能であるとは、わたくしには想われません。

わたくし自身、まだ人のことは言えませんが、日本語人はまだまだ、英語を日本語流に解釈（すなわち誤解）し、一方、日本語の文体を中途半端に英語化し、多少の混乱があるのでないでしょうか。

語・句・節・文・文章による説明・説得の機能を急ぐあまり、今の言語学や論理学や世界学は、人間の認識発達の生理や認識交流の生理の解明が充分でありません。

英語の世界観

交流言語において、第一者＝言語者があり、第二者＝言語理解者があり、第三者＝環境者（人またはもの）があります。

英語の概念の慣習は 第一者・第二者・第三者 に着目しそれらについて表す交流体詞を細かく表現します。

交流体詞「I, you, he, she, it」

集り形変＝ かぞえる実体の体詞に集りを表す体詞が浸透した内容浸透形変（内容は浸透があるとともに形式は変化しない内容浸透形同を含む）

集り形変交流体詞「we, you, they」

集り形変「cow cows」 「ox oxen」 なじ

所有形変＝ 体詞に所有を表す静辞が浸透した内容浸透形変

所有形変交流体詞「my, your, his, her, its, our, your, their」 (静辞的体詞)

所有形変「George George's」 「today today's」 なじ

対象形変＝ 交流体詞に動作対象を表す関係詞が浸透した内容浸透形変（内容浸透形同を含む）

対象形変交流体詞「me, you, him, her, it, us, you, them」 (関係詞的体詞)

英語の交流体詞には、基本形（集り形変を含む）・所有形・対象形があります。

自身接尾「self, 集り形変 selves」＝ 自身を表す接尾体詞部

第一者・第二者は交流体詞所有形と合成体詞「myself, yourself, ourselves, yourselves」

第三者は交流体詞対象形と合成体詞「himself, herself, itself, themselves」

不特定体詞＝ 不特定な人またはものを表す体詞

人「who, 所有形変 whose, 対象形変 whom, who」もの「what」 2以上選

択肢「which」 2選択肢「whether」

遠近体詞＝ 「と近いまたは遠い空間関係にある実体または空間領域を表す体詞

近「this, 集り形変 these」 遠「that, 集り形変 those」

英語の抽象的な「I」にあたる日本語としては「おれ」(孤立的)「われ」(仲間も意識)「ぼく」(公僕も意識)「わたくし」(公あがたに対する私わたくし)などすべて素朴に具体的な情感・情念をともなう体詞です。

英語の概念の慣習は、交流言語においても学問言語においても、かぞえる実

体とかぞえない実体を区別します。

不特定個体詞「a」 = かぞえる実体の個の実体を不特定に表す体詞

句「an apple」 不特定個体詞「an」 + 体詞「apple」 (抽象的な「an」から具体的な「apple」へという語順の句)

文「What a beautiful flower!」 不特定なものを表す体詞「What」 + (感動の動辞の無語) + 不特定個体詞「a」 + 静詞「beautiful」 + 体詞「flower」 (詞は抽象的から具体的にへという語順の文)

句「a Shakespeare」 (シェイクスピアのような人) 不特定個体詞「a」 + 個別体詞から転化した同類体詞「Shakespeare」

句「have a walk」 動詞「have」 + 動的属性をかぞえる実体化しての不特定個体詞「a」 + 実体化する動的属性を表す動詞「walk」

区別体詞「the」 = かぞえる実体の個の実体やかぞえる実体の集り全体やかぞえない実体や広域の実体を他と区別して抽象的に表す体詞

句「under the tree」 関係詞「under」 + かぞえる実体の個の実体の区別体詞「the」 + 体詞「tree」

句「in the water」 関係詞「in」 + かぞえない実体の区別体詞「the」 + 体詞「water」

句「the poor」 (貧しき人々) かぞえる実体の集り全体の区別体詞「the」 + 静詞「poor」

句「the universe」 広域の実体の区別体詞「the」 + 体詞「universe」
さらに英語の不特定詞や体詞や遠近詞です。

不特定静詞「how」 = 不特定な静的属性を表す静詞

不特定関係詞 = 不特定な場所や時間や理由を表す関係詞
場所「where」 時間「when」 理由「why」

抽象静属体詞「such」 = ある静的属性をもつ実体を抽象的に表す体詞
句「such a lonely word」 抽象静属体詞「such」 + 不特定個体詞「a」 +

静詞「lonely」 + 体詞「word」 (抽象的から具体的にへという語順の句)
遠近関係詞 = 「と近いまたは遠い場所や時間を表す関係詞

場所の近「here」 遠「there」 時間の近「now」 遠「then」
さらに英語のかぞえる存在についての詞です。

個体詞「each」 = かぞえる実体について個の実体に着目する体詞
全体体詞「every」 = かぞえる実体についてすべての個の実体を表す体

詞
全時間係詞「ever」 = かぞえる時期ないし時刻についてすべての個の

時期または時刻を表す関係詞

縮合語 forever = 時間の範囲に着目する関係詞 for * 全時間係詞 ever

縮合語「never」＝否定動辞「not」＊全時関係詞「ever」(動辞的關係詞)
不特定詞と全時関係詞「ever」の縮合語「whoever」「whatever」「whichever」
「however」「wherever」「whenever」
英語においてももっとも抽象的な詞は不特定個体詞「a」^{as}と全時関係詞
「ever」です。欧米において数学の集合論や物理学の素粒子論が発達した
遠因でありまじょう。

英語の論理

英語の動辞や動詞についてまとめます。

第一個現形変＝ 第一者の個の直接現在または媒介現在に帰属する「動
辞 be」または「断定動辞 do + 動詞 be の省略句」であることを表す関係詞、
が浸透した内容浸透形変

「動辞 be」 「関係詞的動辞 am」 「断定動辞 do + 動詞 be の省略句」

「 (断定動辞 do の無語) + 関係詞的動詞 am」

第二個現形変＝ 第二者の個の、以下同様

同様、「are」

第三個現形変＝ 第三者の個の直接現在または媒介現在に帰属する「動
辞 be, do, have」または「断定動辞 do + 動詞の省略句」であることを表す
関係詞、が浸透した内容浸透形変

「動辞 be, do, have」 「関係詞的動辞 is, does, has」

「断定動辞 do + 動詞 be, do, have, give, take などの省略句」 「 (断定
動辞 do の無語) + 関係詞的動詞 is, does, has, gives, takes などの

集り現形変＝ 第一者・第二者・第三者それぞれの集りの、以下第二個
現形変と同様

第二個現形変と同様、「are」

途上形変＝ 動的属性の途上面という静的属性を表す静詞、が動詞に浸
透して静詞に転化する内容浸透形変

動詞「run」 「途上静詞 running」(動詞的静詞)

「Naoko is running.」(Naoko は「run の途上面」です。)

和訳例「尚子が走っています。」の「走っています」 動詞「走る」の
内同形変「走り」+ (断定動辞「ある」の無語^{走り}+ 確認動辞「た」の内同
形変「て」+ 動詞「いる」の内同形変「い」+ 断定敬動辞「ます」

なお、日本語の「いる」という動的属性は「ある」という動的属性のう
ち特殊なものです。「いる」は「変化の中にある」という特殊な関係をと
もなう「ある」です。

「中継車は今マラソンの折返点にいます。」「中継車」の「いる」に対し、

「坐禅するわれは今、大地の「じ」にどっしりとある。」「坐禅するわれ」の「ある」。

結果形変 = 動詞の属性の結果面という静的属性を表す静詞、が動詞に浸透して静詞に転化する内容浸透形変（内容浸透形同を含む）

動詞 write」 結果静詞 written」（動詞的静詞）

「Ryoma has written the letter.」 体詞「Ryoma」 + 第三個現形変動辞「has」 + 結果静詞「written」 + 区別体詞「the」 + 体詞「letter」（Ryoma は「the letter を write の結果面」を有している。 = 龍馬は問題の手紙を書いた状態にある。）

和訳例「龍馬はもうその手紙を書いた。」

「I have been to Tsushima.」 交流体詞「I」 + 動辞「have」 + 動詞「be」の結果静詞「been」 + 関係詞「to」 + 体詞「Tsushima」（I は「be to Tsushima の結果面」を有している。 = ぼくは対馬への移動という経験があります。）
和訳例「ぼくは対馬へ行ったことがあります。」

過去架空形変 = 第一者・第二者・第三者の過去または架空に帰属する動辞または「断定動辞 do + 動詞の省略句」であることを表す動辞、が浸透した内容浸透形変（内容浸透形同を含む）

動辞 be」 動辞 was, were」（第一者・第三者の個の過去または一部架空に帰属する場合のみ was）

「断定動辞 do + 動詞 be の省略句」 「（断定動辞 do の無語） + 動詞的動詞 was, were」（同様）

動辞 do, have, will, can, may など」 動辞 did, had, would, could, might など」

「断定動辞 do + 動詞 do, have, write などの省略句」 「（断定動辞 do の無語） + 動詞的動詞 did, had, wrote など」

「If the sun were to rise in the west, I would not change my mind.」 の「were to rise」 「the sun」の架空に帰属する動辞「be」たる「were」 + 関係詞「to」 + 動詞「rise」 「would not change」 「I」の架空に帰属する動辞「will」たる「would」 + 否定動辞「not」 + 動詞「change」
和訳例「たとえ太陽が西から昇るようになっても、私の考えはかわりません。」

英語の動辞と動詞への関係詞・動辞・静詞の内容浸透についてまとめます。

動辞「be」と動詞「be」には現在形があります。

動辞「do, have」と動詞には第三個現在形があります。

総じて、動辞と動詞には基本形・一部現在形・過去架空形があります。動詞から転化した途上静詞・結果静詞があります。

日本語の動辞や動詞にこのような内容浸透はありません。したがって、日本語の動辞や動詞には基本形・現在形・過去架空形といった形式はありません。日本語の動詞には途上静詞・結果静詞への転化といったことはありません。

過去に対する追想、未来に対する意図、直接現在または媒介現在に対する確認・意志、過去・現在・未来に対する予想・空想・仮定。これらをたとえば英語または日本語はどう表現するか。対時間表現 と呼びましょう。

英語の動辞や動詞においてどういう内容浸透形変(形同を含む)があるか。そもそも、対時間表現 と英語の動辞・動詞の内容浸透形変の議論が、英語人において少し混乱しています。英語とは異質な 対時間表現 のある日本語について、英語人による議論を頼りに議論することは、あまり生産的ではありません。むしろ日本語の研究から日本語の特殊性のみでなく言語の普遍性をも解明し、逆に英語の特殊性を浮彫りにしていくべきであります。こういう姿勢を、国学伝統を現実論化してきた、時枝誠記・三浦つとむ・今井幹夫・宮下眞二らに学びたいものです。(末尾文献参照)

日本語の場合。過去に対する追想 追想動辞「た」。未来に対する意図 意図動辞「う」。直接現在または媒介現在に対する確認 断定動辞「ある」(のことも多い)・断定敬動辞「ます」・確認動辞「た」・断定動辞「だ」・断定敬動辞「です」。

同じく意志 意志動辞 ・意志敬動辞「ます」。

過去・現在・未来に対する予想 予想動辞「う」。同じく仮定 仮定動辞「ら」。同じく空想 直接に表す動辞はない。

英語の場合。対時間表現 は動辞や動詞の基本形・一部現在形・過去架空形と必要に応じて動詞の途上静詞・結果静詞を組みあわせて行います。詳細な分類は英語の専門家にお任せします。

次に、英語の動辞や動詞の体詞化について代表的なものです。

断定動辞「do」の概念を実体化した動辞的体詞「to」

「To see is to believe.」(百聞は一見にしかず。)

「I would like to drink a glass of beer.」(ビールを一杯飲みたいです。)

ただし、たとえば以下の「to」は動辞的体詞ではなく関係詞「to」です。

「I'm going to start a new business.」(新しい事業を始める予定なんだ。)

「I am glad to see you.」(君に会えて嬉しい。)

過程形変 = 動詞の動的属性の過程を実体化して体詞にする、内容浸透

形変 (形式は途上形変と同じ)

「動詞 come, smoke」 「過程体詞 coming, smoking」 (動詞的体詞)

「Do you mind them coming too?」(彼らも来てもらいませんか。)

「He stopped smoking.」(彼は禁煙した。)

動属対象形変⇐ 動词的属性の対象を表す体詞、が動詞に浸透して体詞に転化する内容浸透形変 (内容浸透形同を含む・形式は結果形変と同じ)

「動詞 build」 「対象体詞 built」 (動词的体詞)

「Rome was not built in a day.」 の「was not built」 過去架空形変断定動辞「was」 + 否定動辞「not」 + 対象体詞「built」 (Rome は「build in a dayの対象」でなかった。)

和訳例「ローマは一日に出来た。」

「He lies buried at Westminster.」 の「lies buried」 第二個現形変動詞「lies」 + 動詞「bury」の対象体詞「buried」 (He は Westminster に「buryの対象」ではない。)

和訳例「彼はウェストミンスターに葬られている。」

英語において静辞は多くありません。代表的なものは次です。

(所有者の概念へ連続する)「of」 (所有対象の概念へ連続する)「with」。
「and」 「or」 「yes」 「no」 「please」。

なお、「not」 「but」 は動辞 「for」 は関係詞、「as」 は抽象静詞です。
さらに、英語において代表的な無語です。

「Do you know Tokieda, Motoki?」 の「Do」 断定動辞「Do」 + (確認する問いの動辞の無語)

「Who is the English teacher?」 (英語に「して」教師」とは何か?) の「Who is」 不特定な人を表す体詞「Who」 + (具体化する問いの動辞の無語) + 第二個現形変断定動辞「is」

「 Silence!」 (静粛に!) の (相手意志への要求の動辞の無語)

英語の論理に関しては以下の区別と連関を考えることが大切です。「主語」 「述語」 「修飾語」 などの形式論ないし機能論において問題が解決することはありえません。以下、(非推論)判断句に傍線を付します。

英語に限らず、文章ないし文の内容として主題と説明のあることが多い。(主部述部の可能性)

英語は動作判断の文型「主句 動作句 対象句」を中心とし他の判断も語順・文型をこれに似せる傾向がある。(英語形式の傾向)

判断構成単位句

英語には第一者・第二者・第三者に帰属する動辞というものがある。(交流言語と帰属動辞という傾向)

英語には動詞から転化した途上静詞・結果静詞がある。(動詞の静詞化)

「 This is a pen.」

「 There is a park.」

「 I love you.」
do love

「 He has written the letter.」

主題「 This」 「 I」 「 He」 説明「 is a pen」 「 love you」 「 has written the letter」。

「 There is a park.」 「 主主題と説明とついで内容がない。

「 I love you」 「 主主題・文型をいせし」 「 This is a pen」 「 There is a park」 「 He has written the letter」

判断構成「 This + is + a pen」 「 There + is + a park」 「 I + love + you」 「 He + has + written the letter」

「 This」 「 a park」 「 I」 「 He」 「 主帰属する動辞「 is」 「 does」 「 do」 「 has」

結果静詞「 written」 あり。判断句「 has」 は動作の判断でない。「 written the letter」という動作結果面を確認する判断である。動辞「 have」 は動作結果面を確認する動辞である。

英語は英語の伝統と創造の中にいて、主部述部の可能性 英語形式の傾向 判断構成単位句 交流言語と帰属動辞という傾向 動詞の静詞化、この5面から観察する必要がある、ということなのです。とくに、英語形式の傾向があるとともに、内容本位において 判断構成単位句があります。ただしこれは、形式と内容の区別と連関として、音声言語と判断構成の区別と連関として、理解することが可能です。たとえば「 written」 を元動詞として動作句のような形式に入れるとともに、結果静詞として判断句という内容には入らない、ということなのです。

根本的には資本制社会の問題点などあるにせよ、欧米史ないし世界史における厳しい論争を生き抜いてきた今の英語には、日本語人が必ずしも得意としない論理が多くある、ということなのです。それを謙虚にかつ冷静に把握し、英語人の認識と日本語人の認識を無理なく無駄なく調和させていくことこそ、日本語の論理学を中心課題であります。健康平和のための中心課題でもありません。日本語の長所短所を反省する早道でもありません。

三浦つとむ『こころとことば』(文献10)「はじめに」冒頭です。三浦つとむ氏から未来をになう子どもたちへの愛でもあります。

「ことばは、人間が心で思っていることをほかの人間に伝えるために、使われています。ですから、人間の心のありかたについて理解するならば、ことばのこともわかってきますし、またことばのありかたを理解するとき、その場合の人間の心のこまかい動きもわかってきます。」

〔文献〕本論を構築するために以下の文献を検討しました。

1 G.W.F.ヘーゲル『哲学史講義 上・中・下巻』(長谷川 宏訳・河出書房新社 1992

～3)

2 ヘーゲル全集『改譯大論理學 上巻の一・上巻の二・中巻・下巻』(武市健人譯・岩波書店 1956～1966)

- 3 三浦つとむ『弁証法はどういう科学か』(講談社現代新書 1968)
 - 4 時枝誠記『国語学原論(上)(下)』(岩波文庫 2007)
 - 5 三浦つとむ『認識と言語の理論 第一・二・三部』(勁草書房 1967～1972)
 - 6 三浦つとむ『言語学と記号学』(勁草書房 1977)
 - 7 三浦つとむ『日本語の文法』(勁草書房 1975)
 - 8 三浦つとむ『文学・哲学・言語』(国文社 1973)
 - 9 三浦つとむ『日本語はどういう言語か』(講談社学術文庫 1976)
 - 10 三浦つとむ『こころとことば』(季節社 1977/明石書店 2006)
 - 11 今井幹夫『あなたとわたしの日本語』とはの構造と表現』(社会評論社 1986)
 - 12 今井幹夫『わかる日本語の教え方日本語の基礎知識と教え方入門』(千秋ヶ谷日本語教育研究所 1988改訂版)
 - 13 今井幹夫『COMPREHENSIVE JAPANESE わかる日本語 第一～5巻』(ベスト・コミニケーションズ 1984～1992の版)
 - 14 今井幹夫『できる日本語 1・2』(国書刊行会 1995)
 - 15 今井幹夫『イラストと例文でわかる「ほん」のことば』(国書刊行会 1999)
 - 16 宮下眞二『英語はどう研究されてきたか現代言語学の批判から英語学史の再検討へ』(季節社 1980)
 - 17 宮下眞二『翻訳の世界選書英語文法批判言語過程説による新英文法体系』(日本翻訳家養成センター 1982)
 - 18 宮下眞二『英語はどういう言語か』(季節社 1985)
 - 19 三浦つとむ編『現代言語学批判言語過程説の展開』(勁草書房 1981)
 - 20 柴崎 律『心から言葉へ現代言語学への挑戦』(論創社 2004)
 - 21 吉本隆明『詩人・評論家・作家のための言語論』(メタローグ 1999)
 - 22 庄司和晃『認識の三段階連関理論』(季節社 1992増補版)
 - 23 庄司和晃『コトワザ教育のすめめ未来の教育学のための文化研究』(明治図書 1987)
 - 24 萩野貞樹『ほんとうの敬語』(PHP新書 2005)
 - 25 齋藤 孝『CDブック 声に出して読みたい方言』(草思社 2004)
 - 26 松本克己『世界言語のなかの日本語日本語系統論の新たな地平』(三省堂 2007)
 - 27 川島正平『言語過程説の研究』(リール出版 1999)
 - 28 佐良木 昌編『言語過程説の探求 第一巻時枝学説の継承と三浦理論の展開』(明石書店 2004)
 - 29 寺島隆吉『地球市民の英語学習と英語にとって「文法」とは何か?』(あすなろ社 2000)
 - 30 黒川泰男『英文法の基礎研究日・英語の比較的考察を中心に』(三友社 2004)
 - 31 渡辺力蔵『日本の創造性創造性のマクロ理論』(近代文芸社 2000)
 - 32 柳父 章『近代日本語の思想翻訳文体成立事情』(法政大学出版局 2004)
 - 33 井沢元彦『点と点が線になる日本史集中講義』(祥伝社黄金文庫 2007)
 - 34 武隈良一『新数学シリーズ15 数学史』(培風館 1959)
 - 35 坂本百大・坂井秀寿『新版現代論理学』(東海大学出版会 1971)
 - 36 三浦つとむ『マルクス主義と情報化社会』(三一書房 1971)
 - 37 原 丈人『21世紀の国富論』(平凡社 2007)
 - 38 山田 学『学問の転換未来の世界を日本から』(民衆図書刊行会 1994)
JOMONあかでみいサイト「店頭」画面参照
 - 39 山田 学『日本民族紹介と日英翻訳機械』「認識と労働」「人間と通信の要点」
同サイト「理念集」画面参照
- 病的戦争な情感・情念を健康平和な情感・情念に止揚できる日本語芸術。そして健康平和のための日本語人と中国語人と英語人の討論。本論がそれらのためのささやかな一助となるなら幸いに「こゝろ」です。
- 本論に対する「質問・意見・修正案を歓迎いたします。